赤木正雄の砂防一路シリーズ　3

オーストリアに学ぶ

曽江谷下流部の土砂流出状況

吉野川の砂防工事に

滋賀県の田上山で山腹工事に携わった赤木は、その後、四国の吉野川支川の曽江谷や日開谷という土砂流出の激しい荒廃渓流の砂防工事に従事するが、赤木の造った砂防堰堤は出水で壊れ、技術者として自責に堪えず、内務省を辞めるしかないと原田貞介内務技監に申し出る。
技監に「沖野さんが君を内務省に採用されたのは将来君にわが国の砂防を見てもらうためなのだ。…退官など夢にも考えてはいけない」と励まされ、技監から借用したオーストリアの砂防の原書を読み、書写し、勉学に励み、土砂の多い渓流での水理学をもっと勉強したい、欧州の砂防の先進国に学びたいという強い願望が募っていく。

2代目内務技監　原田 貞介[1]

オーストリア留学を決意

ついにこの願望を実行することを決意し、内務省を休職し自費でオーストリアのウイーン農科大学に留学する。
兄、赤木一雄から旅費の援助を得て、家族を残し、大正12年(1923)5月27日、神戸港のメリケン波止場から「榛名号」で出港し、同年7月8日マルセイユに上陸、まずはベルリンで2ヵ月半ドイツ語の勉強をする。
同年9月3日に、9月1日の関東大地震の知らせを聞くが、9月21日家族は無事であったとの知らせを聞くまで不安の日々を過ごす。
赤木は日記[2]に『この電報によって、今までもやもやした心の霞が、一変に晴れて仕舞、頭の中がスッキリした。それにしても、私がどのように心配しているかと、国の兄(注 赤木一雄)が真心から打って寄越した電報と思うと、有難くって涙が知らず知らずのうちに出てきた。』と記す。

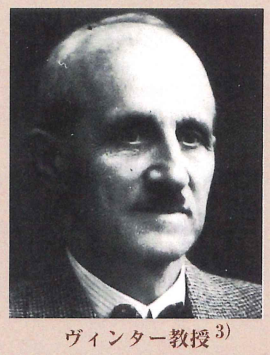
ベルリンでの赤木（赤木一彦氏蔵）

『Handbuch der Wasserbau』
赤木が書写した初版の表紙
（砂防図書館蔵）

ウイーンでの日々[2]

ベルリンでドイツ語勉強を終え、同年10月3日にウイーンに落ち着く。
早速、ウイーン農科大学のヴィンター教授と面会し、砂防の聴講許可をもらい10月15日入学手続きをしたが、水理実験は水路が使えるまでには半年はかかるということを聞き大いに落胆する。
教授の授業を聴講する一方、ウィーンの街をあちこち訪れたり、図書館にこもって勉強の日々を過ごすが、目的に着手できない苛立たしさが日増しに募ってゆく。
春が来るのを待ちかねたように留学の大きな目的のひとつ、砂防施工地の現場へ出かける。
手始めにヴィンター教授とともにウィーン近郊の砂防現場を視察し、教授の教えを直接実地で勉強する。
大正13年(1924)6月11日からはオーストリア各地、イタリアやスイスなどの砂防現場視察の旅に出る。
ようやく実験水路の使用許可が下りるが、実験ができるのは9月2日からであった。
それでも赤木の喜びは大変なもので、以降充実した日々を過ごすことになる。

ウイーン農科大学



ヴィンター教授[3]

最初に訪れたウイーン郊外リリエンフェルトのユングヘルンタール川の砂防

新渡戸稲造博士との再会

大正12年(1923)8月、赤木はジュネーブの国際連盟事務局を訪れ、恩師の新渡戸稲造次長と再会する。同じころジュネーブの国際労働会議で政府代表随員を務めていた川西実三は次のように振り返る。[4]

「『面白い風をして君の友達が訪ねて来たよ、一所に飯を食はう』と昔の恩師、當時の国際聯盟事務局次長新渡戸博士から自分の所へお電話を頂いた。リュックサックにゲートルという聯盟始まって以来の異様の風體で、新渡戸博士の事務室に罷り通ったのは、(中略)わが赤木君だったのである。(中略)明治四十三年九月の入學式に訓話された先生と、それから十數年その訓話を文字通り實行して居る生徒とは、儀禮を越えた大きなよろこびを以て迎へ迎へられたのであった。」

この時のことを赤木正雄は、日記[2]にこう記している。

「国際聯盟事務局に次長の新渡戸稲造先生を訪問した。(中略)日頃から礼儀正しい先生のこと、粗服にリックサックを担ぎ、登山靴に登山ステッキの私を事務局の玄関先で見られた時は，定めし何処の誰かと、異様な感を抱かれたに相違ない。先生は早速私に『日本から沢山の訪問者があるが、君のような人は初めてだが、一体どうしたのか』と質ねられた。私は、砂防に志し、今ウィーンに来て斯く斯くであり、オーストリアを初め、各国の砂防工事の現地視察を行っていること、(中略)と答えると、　私の旅装を直ちに理解され、大変に喜ばれるとともに、一高時代に寮生活をした時の友人であった川西実三君が、先生の下で働いていることを話すと、直ぐに同君を呼ばれた。昼は川西君とともに先生の招宴に招かれて、いろいろと歓談した。」

新渡戸稲造博士は驚きと感激で赤木正雄を迎え、恩師とその教えを受けた生徒は遠く欧州の地で再会し、旧交を温めたのである。

一高中寮二番室の人々　　(川西 実三蔵)
右から 2番目が赤木 正雄、3番目が川西 実三

川西 実三[5]

ウイーンで撮影した
現場視察の出で立ち

赤木スタイル

赤木はオーストリア各地を視察し、留学の記念にしようと現場視察時の出で立ちを写真に収めた。登山靴とゲートルとレインハット、リュックサックにピッケルというスタイルであった。帰国後も現場に行くときはもちろん、このスタイルである。のちに「赤木スタイル」と呼ばれるようになった。現場には時としてオーストリアの民族衣装であるローデンコッツエ[6]と呼ばれるマントを着ることもあった。

ウイーン農科大学創立100周年にて

赤木が学んだウイーン農科大学は昭和47年(1972)に創立100周年を迎え、記念セミナーが開かれた。留学中の岩手大学石橋秀弘教授が、「かつて本学で学んだ赤木博士が文化勲章を受章したことを報告すると、会場から満場の喝采が起こり、アウリツキー教授からは、『赤木正雄がオーストリアで学んだ砂防は日本で立派に成長した』と日本の砂防に対する絶大な賛辞があった」と報告している。赤木は若き日々を過ごしたウイーンでも大きな祝福を受けたのである。[7]

ローデンコッツェを着た赤木

大きな成果をあげて

赤木はオーストリアの砂防技術をヴィンター教授から学び、水理実験では急流河川の水理の成果を得た。また各地の砂防施工地を見て、多くの経験と知識を持って留学を終えた。大正14年(1925)2月11日豪華船「アクィタニア号」でフランスからアメリカに渡り、同年4月10日に帰国する。
帰国後、ヨーロッパでの経験を「土木学会誌」や「水利と土木」に発表し、日本各地の砂防工事に生かされ、技術を大きく転換させていくこととなる。

<参考文献>
1) 藤井肇男：土木人物事典、株式会社アテネ書房、2004.12
2) 赤木正雄：赤木正雄先生の滞欧日記、(社)全国治水砂防協会、2008.3.24
3) オーストリアの治山治水100年史　1884－1984(暫定日本語版)、1984
4) 川西実三：治水に一生をさゝげる 赤木正雄君、砂防と治水第3号、1950.9.1
5) 歴代知事編纂会：新編 日本の歴代知事、1991.11.1
6) 石原あえか：教養の近代測地学、(一財)法政大学出版局、2020.11.25
7) 石橋秀弘：ウイーン農科大学創立100周年を迎える、新砂防87、1973.3

■ 次回は「砂防技術の発展に尽くす」

（一社）全国治水砂防協会 赤木記念館 作製
砂防図書館 協力